

書評『慰安婦と兵士』

大人のピアノ研究会代表 三上香子

はじめに

日本人の多くは、「慰安婦問題はなぜ解決しないのか」という疑問をもっているのではないだろうか。また、報道で元慰安婦をみるたびに、胸が締めつけられるような思いをもつ女性も存在するだろう。しかしこのような疑問や感情について、これまで明確に説明する者はいなかった。それどころか、日本には慰安婦問題にはできるだけ触れないでおこうとする風潮さえある。

本書は、これまで日本人があえて避けてきた慰安婦問題について、山田正行が真正面から向き合い、戦争体験者の小説や慰安婦本人の発言から、慰安婦に対する新たな知見を見出したものである。

1. 内容

本書は全12章で構成されており、大きく分けると戦争体験をもとに書かれた小説の考察と、慰安婦への聞き取り調査の結果の2つに分けられる。具体的には、第1、2章は伊藤佳一の小説をもとに、当時の朝鮮人慰安婦の立場と、肉欲を伴わない愛について紹介されている。第3章は、李佳炯（朝鮮人兵士）の体験談をもとに、慰安婦の行動が、戦場で病んだ兵士の生きる糧になった例が示されている。第4章は朝鮮人慰安婦・金春子の手記にみられるライフ・ヒストリーである。第5章から第9章は、田村泰次郎の小説をもとに、朝鮮人慰安婦と日本兵の自爆心中、愛し合いながらも慰安婦を見捨てた日本兵の悔恨、皇軍兵士と中国共産党兵士（二重スパイ）の葛藤に苦しむ恋愛、処刑の前に夢中で肉体を交わす男女など、性行為を超越した愛欲について記されている。第10章は、つかこうへいの小説が、「従軍慰安婦は必ずしも不幸ではなかった」という解釈のうえで書かれたことに言及されている。そして第11章と最終章は、著者の研究内容の裏付けで締めくくられている。

2. 感想

本書でもっとも印象に残っているものは、苛酷な運命のなかで前向きに生きようとした春子の章である。ここでは春子が慰安婦の立場を前向きにとらえ、もてなしの心をもちながら日本兵を慰める姿が描かれている。水商売の女性を描いた物語ではお金のために男に媚びる女性が描かれることがあるが、春子には、それとはまったく異なる仕事へのプライドと、日本兵への慈愛があった。しかし実際には、一日に30人も男を取らされる苛酷な環境があり、多くの兵士は春子の心遣いに気づくことがなかったであろう。それでも春子が日本兵に尽く

したことについて、著者は生国を想う春子の愛国心をあげた。このことから私は、日本兵と慰安婦の双方に「国を想う」という共通点を見出したみた。

なお著者は、ゆがんだ性癖をもつ兵隊に凌辱される慰安婦の存在にも触れている。しかし、すべての慰安婦が被害者ではないことはすでに示されている。そして、慰安婦が日本による被害者として政治利用されている現状と、慰安婦問題が謝罪や金銭で解決しない理由を説いた。これは、筆者が以前から疑問に感じていたことであるが、それが本書でみごとに解決された。

おわりに

冒頭で記したように、慰安婦問題が報道されると、多くの女性は心を痛める。また、女性蔑視を感じ、怒りに震えるだろう。それは同性として当然の感情だと思われる。しかし、彼女らを可哀想な存在だとみなすのではなく、春子のように劣悪な環境でも前向きに生きようとする女性を想像するならば、それは現代の日本人女性が目標にする女性像になるかもしれない。

本書を読んで、筆者がこれまでに心のなかにもっていた慰安婦像が、外部から刷り込まれたものであることに気づいた。もちろん、これは一読者の受けとめ方で、他の捉え方もあるだろう。それでもなお、深く考えさせるものがある。一度本書を読むならば、自分をもつ慰安婦像と対比してみると興味深い結果が得られるであろう。